

## G1

## 夏目漱石「私の個人主義」と漱石作品との関連

青木 詩織

## 要 旨

明治の代表的な文豪夏目漱石は、晩年に学習院輔仁会での講演で、「私の個人主義」と掲げ、独自の個人主義を提唱した。漱石は生涯に渡って数々の名作を生み出しているが、その中で個人主義はどのように反映されているのか。また、それは社会において実効性のあるものなのか。「個性の尊重」「権力」「金力」の3つの観点から作品との関連性を調べ、作品内における「自我を確立できない人」の存在と、漱石の個人主義の困難さに気づいた。

## 1 目的

夏目漱石の提唱する個人主義は、作品内でどのように表れているのか。また、作品内で自己を確立し、幸せになった者はいるのか。二つを照らし合わせ、漱石の考えた個人主義についてより深い考察をしていく。

## 2 方法

学習院の講演会において漱石が提唱した個人主義は、以下の3つ

- ① 自己の個性の発展をし遂げようと思うならば、同時に他人の個性を尊重しなければならない。
- ② 自己の所有している権力を使用しようと思うならば、それに付随している義務というものを心得なければならない。
- ③ 自己の金力を示そうと願うならば、それに伴う責任を重んじなければならない。

これらの要素を基に、他者との人間関係がより深く表されている『坊っちゃん』『虞美人草』『それから』『こころ』『道草』の5作品を素材に検証した。

仮説Ⅰ：漱石は自身の個人主義を作品内に反映させている。

仮説Ⅱ：権力から逃れて独立した者は、自己を確立し、幸せになっている。(②のみ)

## 3 結果

## ① について

仮説Ⅰについて、自己の個性と他人の個性の衝突への回避は、『こころ』の「先生と私」の関係で同様の記述がみられる。

・『こころ』p47 より先生の言葉を抜粋

「(先生に近づこうとする私に)とにかくあまり私を信用しては不可せんよ。今に後悔するから。(中略)私は未来の侮辱を受けないために、今の尊敬を斥けたいと思うのです。私は今より一層淋しい未来の私を我慢

する代りに、淋しい今の私を我慢したいのです。自由と独立と己れとに充ちた現代に生れた我々は、その犠牲としてみんなこの淋しみを味わわなくてはならないでしょう」

## ②について

1. 仮説Ⅰについて、以下の点に留意した。
  - 権力者・被抑圧者の関係性
  - 権力の特徴
2. 仮説Ⅱについて、以下の点に留意した。
  - 権力による個性・自由の侵害を受けた被抑圧者の変化・その後の結末
  - 権力を断ち切った者とそうでない者の違い

## ○作品のまとめ

『坊っちゃん』

権力者：赤シャツ 被抑圧者：坊っちゃん

関係性：教頭／教師

内容：自身の都合のいいように言葉で押し込めたり、捏造をしたりする。

変化：教師という職に不満を持つ。単純や真率が笑われる世に気づく。

結末：殴って反発をし、職を辞して東京に帰る。結果腹いせをしただけ。

『虞美人草』

権力者：井上孤堂 被抑圧者：小野清三

関係性：恩師／養子

内容：養い、教育した代わりに、将来自分の娘と結婚することを約束させる。

変化：自らの恋と、過去の恩に迷う。

結末：自らの恋を諦め、結婚を認める。

『それから』

権力者：長井 被抑圧者：代助

関係性：父／息子

内容：自身の理念の強要。結婚の勧め。

変化：父の昔気質の篤い教育を疎み、親子仲が冷却する。家族と好きな女の間で揺れる。

結末：勧めを断り、好きな女と不倫。一家の名誉を傷つけたとして家族に絶縁される。

『こころ』

権力者：父・母・兄 被抑圧者：私

関係性：家族

内容：就職先の催促。私と異なる価値観。

変化：考え方の相違から両者の間に距離ができる。家族よりも先生の方に興味がいく。  
 結末：父の最期を看取らず、先生のために東京へ帰ってしまう。

#### 『道草』

権力者：島田・御常 被抑圧者：健三

関係性：養父・養母／養子

内容：本当の親だと教え込ませる。甘やかす。  
 変化：反発する精神を持ち、軽蔑する。また、幼心ながら、親切の中の欲に気づく。  
 結末：嫌々ながら従い、甘やかされたため、強情な性格に育つ。

#### ○権力を断ち切った者

- ・坊っちゃん『船が岸を去れば去る程いい心持ちがした』
- ・代助『彼は彼の頭の中に、正当な道を選んだという自信があった。彼はそれで満足であった』

#### ③について

仮説Ⅰについて、作品内の「金力」のやり取りで以下の点に留意した。

- 使用者・影響を受ける人
- お金の使用による変化

#### 『坊っちゃん』

赤シャツ→坊っちゃん、山嵐、うらなりなど

行動：正当な理由なく教師の給料を増減させ、差別化を図る。

変化：坊っちゃんに小賢しい権力者への不信を植えつける。

#### 『それから』

長井（父）→代助

行動：息子に仕送りをする。代助は高等遊民となる。

変化：親子の間に人生観の違いが生まれ、意思のすれ違いが起こる。

#### 『ころ』

叔父→私（先生）

行動：「私」の財産を横取りし、私腹を肥やす。

変化：「私」の人間不信を生むきっかけとなる。

#### 『道草』

健三→島田、御常、姉、兄、妻の父

行動：お願いされ、お金を貸す。（健三自身も裕福ではない）

変化：健三夫婦の間に亀裂ができ、健三を憔悴させる。

## 4 考察

### ①について

先生は世に自分の思想を広めようとはしない。また、先生に傾倒している私を窘め、遠ざけている。ここから先生の個性の独立と介入・押しつけを認めない姿勢が見て取れる。また、この他者の個性との懸隔を「淋しい」とも表現しており、漱石自身で自らの個人主義の欠点も指摘している。

### ②について

- ・多くの作品の主人公は被権力者であり、権力者目線の作品はこの5作品では見られなかった。
- ・権力者と被権力者の関係の特徴として、「立場」「血縁」「恩・師」が挙げられた。
- ・描かれているのは権力による圧力の中で様々な形でもがく主人公の姿で、作品から直に権力者の義務を読み取ることは難しかった。
- ・坊っちゃんと代助は自我を押し通し権力から逃れることに成功したが、どちらも収入源を失ってしまった。このことから権力から逃れる代償に失われるものも描いたことが分かった。
- ・権力に従った作品では、自我と権力に従わざるを得ない現実との葛藤が多く描かれているように感じた。

### ③について

- ・主人公が基本裕福なため、金力の使用者の立場は様々である。
- ・『坊っちゃん』『ころ』などで悪辣な金力使用者を描き、責任を追及する一方、『それから』『道草』のようにお金を渡す・受け取る、さらには貸すという行為によって、人間関係のしがらみを描いている。

→金力の表し方は悪利用に限らず、責任の所在は使用者に限らない。

## 5 結論

漱石は作品の中で3つの条件を満たす人というよりも、錯綜する人間関係の中で「自我」を確立できない人や、確立できても現実で何かを失ってしまう人を描き、そこから日本社会での「自我」の確立・自身の提唱する個人主義の難しさを示したと言える。

### 【反省・課題】

もっと他者の論文を用いるべきだったと思った。また、漱石の作品はもっと沢山あるので、母数を増やして確証を得たいと思った。

## 6 参考文献

夏目漱石『坊っちゃん』『虞美人草』『道草』『それから』『ころ』新潮社（新潮文庫）